

こんにちは せかいのなかまたち

町田 健

横須賀市立田浦小学校

実践教科：特活、音楽

時間数：8時間

対象学年：小学2年生

対象人数：37名

カリキュラム

<実践の目的>

- ・カンボジアの写真や遊び、歌などを通して、世界を知る。
- ・世界にはさまざまな文化があることを知り、その楽しさや魅力を感じ取る。カンボジアの国・人々をクローズアップすることにより、一つひとつのことに真剣に向き合う姿勢を育てる。また、世界のさまざまな国にも目をむけてそれぞれの良さを感じ取り、日本の良さを改めて見つけて、今の自分の生活を振り返る。

授業の構成

時限	テーマ・ねらい	方法・内容	使用教材
1 (特活)	「せかいをたびしよう」 ねらい:世界の国めぐりからカンボジアに出会い、興味を持つ。	(1) 世界のそれぞれの国を連想させる写真を見せ、どこの国かあてさせる。 (2) カンボジアについての写真を見せ、どこの国が連想させる。(3ヒントクイズ) (3) カンボジアの歌「アラピア」を歌いながら遊び「トンペアン・ルサイ」をして、楽しむ。	(1) 白地図(世界・アジア) (2) カンボジアで撮影した写真、カンボジア国旗など (3) 「アラピア」 (4) パワーポイント
2 (特活)	「カンボジアの朝市を歩こう」 ねらい:カンボジアの気候、生活、文化に親しむ。(特活)	(1) カンボジアのあいさつ、国情報を知る。 (2) カンボジア3輪タクシー「シクロ」に乗って、朝市を廻る。 (3) 写真から馴染みのない野菜や果物や知っているものがあることに気づかせる。 (4) カンボジアの高床式家屋や人々の服装の特徴などから理由を考えさせ、気候の違いに気づかせる。	(1) カンボジアで撮影した写真 (2) パワーポイント (3) 民族衣装・クロマー
3 (特活)	「チョムリアップ・スオー！カンボジアのなかまたち」 ねらい:カンボジアの子どもたちの生活を疑似	(1) グループごとに、カンボジア生活クイズに答え、日本と似ているところや違いを知る。 (2) 算数の教科書から、かけ算の問題であることに気づかせ、挑戦させる。	(1) パワーポイント (2) カンボジアの算数教科書 (3) 「カンボジアの子どもたち」(学研)

	体験し、文化・生活に親しむ。	(3) カンボジアの学校生活を通して、思ったことを発表させる。	(4) カンボジアで撮影した写真
4 (音楽)	「世界の歌を歌ってみよう」 ねらい:カンボジア語や英語などさまざまな言葉を聞き、歌やゲームを楽しむ。	(1) 音楽教材「みんなで1・2・3」をカンボジアなど、さまざまな国の数え方で歌う。 (2) カンボジアでの「アラピア」の映像を見て、カンボジア語版で歌ってみる。 (3) カンボジアで人気の遊び「羽根けり」の映像を見せ、体験して楽しむ。	(1) 動画資料(「アラピア」「羽根けり」) (2) 「アラピア」 (3) プロジェクター
5 (特活)	「1まいのしゃしんから」 ねらい:フォトランゲージから家族の絆の深さに気づく。	(1) 写真を見て、グループごとに場面や様子を思い浮かべてセリフを考える。 (2) 家族との絆の深さに気づかせる。	(1) カンボジアで撮影した写真 (2) プロジェクター
6 7 (特活)	「知りたいな いろんな国のこと」 ねらい:自分が興味のある国の生活、文化などを調べる。	(1) 興味をもった国を取り上げ、文化・生活・学校など気なることを調べる。 (2) 調べたことをワークシートにまとめる。	(1) 世界地図 (2) プロジェクター (3) 図鑑・関係書籍
8 (特活)	「こんな国があったよ」 ねらい:自分が調べた国のようすを、友だちと発表し合う。	(1) それぞれ調べた国のようすを発表し合う。 (2) ポスターセッション形式で、発表場所を巡り、国によって違いがあることに気づく。	(1) 世界地図 (2) プロジェクター

授業の詳細

1時間目:「せかいをたびしよう」

夏休み前に子どもたちには、担任が「ある王国を訪れる」と伝えていたので、この第1回目を楽しみにしていたようだった。世界地図を見たことがない子が多い。そのため、子どもたちがどのようにカンボジアと出会うのがよいかを、考えていた。本市では、小学1年生から英語活動の時間があり、ALTから彼らの母国(アメリカ・イギリス)の話を聞く機会がたくさんある。そのため、子どもたちは日ごろから他国の文化や習慣を魅力的に感じている様子であった。また、学級に外国にルーツを持つ子たちがいたため、普段の学習や生活の場面でも外国の話がよく出ていたことも、子どもたちがこの学習を心待ちにしていた理由のひとつだと考える。

今回、導入部で示したオーストラリア、中国などの写真も情報やイメージを活かして国を当てていた。そして、カンボジアで撮影してきた街並やアンコールワットの写真を示した。ヤシの木の街路樹から「暖かい国」まではイメージできたようだ。最後にカボチャのイラストを見せ、そこから今回の国がカンボジアであることを子どもたちは知った。

どこのくにでしょうか？

- ・ 自由の女神・ハンバーガー・星条旗 アメリカ
- ・ 中国の街並み・シュウマイ 小籠包 中国
- ・ オペラハウス・カンガルー・オーストラリア国旗 オーストラリア



使用した資料（一部抜粋）

カンボジアで知らない人はいないと言われる歌「アラビア」をみんなで聞き、曲に合わせて「トンペアン・ルサイゲーム」をして楽しんだ。とても簡単なゲームだが、トンペアン（竹の子）とルサイ（竹）というクメール語に苦戦し、始めは「難しいよ」「どちらかわからない」と言っていた。が、すぐに慣れ、ひっかかる子はいなくなったのには大変驚いた。

2時間目：「カンボジアの朝市を歩こう」

現地研修で撮影してきた写真を見ながら、カンボジアの街や家庭を巡っていくような構成とした。「シクロという三輪自転車タクシーに乗って、朝市を廻ってみよう」と話すと、子どもたちはとても喜んでいて。画面に映る現地の人々に、進んで覚えたての「チョムリアップ・スォー（こんにちは）」で声を掛ける子どもたち。気分は、すっかりカンボジア小旅行である。市場の店先には、日本で馴染みの野菜や果物もあれば、ドラゴンフルーツやマンゴスチンなどあまり見られないものが並んでおり、興味津々の様子だった。



使用した資料（一部抜粋）

その後、シクロは、カンボジア式高床住居へ向かう。

「家が木の柱で持ち上がっている」「大きい窓があるよ」「家の下は、何をやるのだろう。」そんな

疑問が子どもたちから出た。みんなで予想し合うと、さまざまな考えが出された。高床なのは主にコブラやトラ、サソリなどの危険な動物から身を守るため、大きな窓は風通しを良くするためだと伝えると、「トラがいるなんて、ビックリした」「どれだけ暑い国なのだろう」との感想が聞かれた。しかし、それはマイナスの印象ではなく、「所変われば、生活の仕方変わるのだな」という多文化への気づきであった。



使用した資料（一部抜粋）

3時間目：「チョムリアップ・スオー！ カンボジアのなかまたち」

より身近に感じられるように「カンボジアの学校に一日入学する」という設定で授業を計画。現地出会った少女が、カンボジアの子どもたちの一日をナビゲーションしていく。



日本でも人気のある絵本

「わたしの名前は、リンです。わたしの一日をしょうかいするね」

スライドで少女を紹介し、「カンボジアのことを何でも聞いてみようね」と促した後の子どもたちの様子に私は驚き、感心した。彼らは、一生懸命にクメール語で話しかけようとしているのだ。おそらく、日本語では通じないと思ったに違いない。子どもたちは、教室にいながら、確かに彼女と出会い、コミュニケーションを取ろうとしていた。

第1問：「カンボジアの子どもたちが好きな教科は、なんだ？」

社会 算数 国語

第2問：「これは、なんだかわかるかな」

	月曜日	火曜日	水曜日	木曜日	金曜日	土曜日
1	社会	国語	国語	社会	社会	国語
2	社会	国語	国語	社会	社会	算数
3	算数	算数	社会	算数	算数	社会

1日に3時間しか授業がないことに、驚いていた。しかし、予想に反してうらやましいという声はあがらなかった。なぜかと尋ねると、「休み時間が短くて、友だちと遊べないから」「もっと勉強したいから」という素直な気持ちが返ってきた。しかし、これは、カンボジアの子どもたちと同じであった。現地で出会った子どもたちも「もっと学びたい」と口々に言っていた。

第3問：「つぎのうちで、本当のことはどれでしょうか」

しゅくたいをわすれたら、一発ギャグを言う。

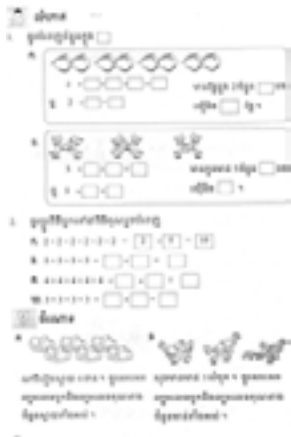
あつい国なので、どの教室にもクーラーがついている。

毎年、学年の最後にテストをうけ、せいせきがわるいと、つぎの学年にあがれない」

第4問「カンボジアの子どもたちが放課後することはなんですか」

自由に意見を出し合わせたが、比較的早く、「家のお手伝い」という声が上がった。日頃から手伝いをしている子どもたちが多いからであろう。しかし、カンボジアの子どもたち（農家の子どもたち）は、繁忙期になると、学校を休んで家の仕事を手伝うことがわかると、先ほどの進級テストのことを思い出し、「カンボジアの子は、大変なんだね」と感想を述べていた。

その後、グループごとに「彼女の宿題」を手伝うことになる。カンボジアで購入してきた小学2年生の算数教科書からあるページだけを抜き出し、挑戦させた。



小学2年算数の問題



授業の様子

クメール語が読めない。始めは「わからないよ」の声が多かったが、よく見てみると今、自分たちも学習している「かけ算」の問題であることに気づく。言葉や生活は違うけれど、学習している内容は同じなのだとなり、さらに親近感を持ったようであった。

子どもたちの感想

家の手伝いをしながら、勉強もしてカンボジアの子はたいへんだと思った。
時間割に3つしか教科がなくて、ふしぎだった。わたしには、いろいろな教科があつてうれしい。

4時間目：「世界の歌を歌ってみよう」

音楽で「アラピア」を歌った。これまでにレクタイムや休み時間などで「トンペアン・ルサイゲーム」をしているときに流していたため、リズムは概ねおさえることができていた。だが、今回は、クメール語で歌うというものであった。まず、これまでの音楽の時間で歌ったことのある「みんな1・2・3」をさまざまな国の数え方で歌い、クメール語の「モイ・ピー・バイ」でも歌った。次に、カンボジアで撮影した「アラピア」の映像を全員で見た。歌詞を見ながら聞いていると、少しずつどの言葉がわかってきた。

事前につけておいた日本語訳でも歌ってみると、クメール語の歌詞の意味がわかったようであった。その後、思い思いにジェスチャーをつけながらアラピアを歌った。

その後、カンボジアの子どもたちが楽しんでた「羽根けり」を映像で紹介し、校庭に出て体験した。5～6人でグループを作り、羽根けりを体験したが、小さな羽根を落とさずにつき続けるのは、とても難しい。手で続けてみてはどうかと声を掛けたが、2、3回続けるのがやっとであった。



羽根けりを体験（難しいので手で）

5時間目：「1まいのしゃしんから」

本実践で、子どもたちに一番感じ取って欲しかったこと、それは「家族の絆」であった。カンボジアでは、子どもたちが弟や妹の面倒を見ているシーンを本当にたくさん見た。それは、我々がどこか忘れていた「絆」その深さを感じた。この学習を通して、教室の子どもたちにも伝えたかった。

カンボジアで撮影した数枚の写真をグループに配り、「写真を見て、自由にお話を考えよう。どんな声が聞こえてくるかな」と投げかけた。写真は「家の手伝いをする子ども」の様子に絞った。



使用した資料（一部抜粋）



授業の様子

国語の「しゃしんから話を作ろう」でフォトランゲージを行っていたので、「今度は、カンボジアの写真でできるね」と子どもたちは喜んでいました。

女の子が裸足であり、色褪せた服を着ていたことを見て、あるグループが「この子はびんぼうなのだろう」と発表した。その後、どのように話が進むのか静観していると、また別のグループが「この子の服はきれいな柄だし、私はみたことがない。貧乏じゃない」と発言した。私は、敢えて深く話さず、「物が無いことは、本当に貧乏なのかな」と話すに留めた。低学年で「豊かさとは何か」を考えるのは少し難しい。



授業の様子

子どもたちの感想

カンボジアはとてもおもしろいと思いました。わたしの日本にないものがカンボジアにはあって、日本にあるものがないカンボジアでした。カンボジアのことをもっと知りたいです。

カンボジアは、とてもあついから、みんなすずしいかっこうをしていました。小さい子どもでも、はたらいしていることにびっくりしました。わたしには、できそうにありません。ですが、カンボジアの子どもたちはそれをかんたんにやっていたから、すごいと思いました。

カンボジアには、いろんな人がいて、いろんな家があるので、そこがおもしろかった。

カンボジアの人は、くふうしているんだな。カンボジアの国は、人を思う心がたくさんある国なんだな。

カンボジアには、バナナの葉っぱで作った家もあるんだなと思いました。

カンボジアの子は、よくおてつだいをするんだな。わたしも家のおてつだいをいっぱいしよう。地面がものすごく光っていたので、あついのがわかりました。

日本とぜんぜんちがうけど、ちょっとにているところがあった。

6, 7時間目：「知りたいな いろんな国のこと」

ここまでカンボジアを通しての多文化理解を進めてきたが、ここからは、子どもたちが興味をもっている国をそれぞれ選び、その様子を調べた。クラスには、日本以外の国にルーツがある子が数名いる。親から聞いたり、旅行で見たりして知ったその国の食事や生活の様子を友だちに進んで話しているため、周りの子たちも比較的 異文化への興味や関心は高い。ある子は、自分の好きなスポーツの盛んな国を選び、またある子は、料理やニュースなどで興味を持った国を調べた。主に、図鑑や世界の文化を扱った本、ガイドブックなどで調べていき、ワークシートにまとめた。

同じ国を調べる子が複数いたので、集まり協力し合って調べさせた。また、一人の子は、アジア、ヨーロッパ、北米、南米など、近い地域でグループを作らせ、協力しながら活動を進めさせた。

8時間目：「こんな国があったよ」

発表場所を4つにし、プロジェクターを使いながら調べたことを発表し合った。子どもたちも4つのグループに分け、前・後半で他の場所での発表を聞いて回る。保護者にも声を掛け、発表会に参加していただいた。

成果と課題

私が今回の研修を受けたきっかけとなったのは、外国出身の保護者から「自分の子どもには、私の国のことをよく知ってもらい、誇りをもてるようになってほしい」という願いを聞いたからであった。その思いにどれだけ応えられた実践になったのかわからないが、子どもたちは学習の中で日本と異なるカンボジアの文化を「魅力」として感じてくれていたように思う。

日本と同じアジアの中の国であるカンボジア。我々大人には、「ポルポト時代の内戦」「大虐殺」「地雷」などの暗いイメージが依然色濃く残っており、経済的にも貧しい国だと認識している人が多い。メディアでも「援助しよう」「学校を建てよう」という支援の動きが放送され、タレントが現地へ行って交流する様子が私たちにも届いている。

一方で、この実践が始まる前、ある子が私に「カンボジアって国では、水たまりの水を飲んでるんだって」と知らせてきた。それはあるバラエティ番組で知ったという。それが現実であるか否かではなく、1つの情報が子どもたちにとっては「その国の全て」となってしまう怖さをそのときに改めて感じた。だからこそ、この授業実践では、「カンボジアはかわいそうな国」「貧しい国」という印象を持たれないように、現地で出会ったたくさんの笑顔溢れるカンボジアの人々やその文化の魅力を、教室にいる子どもたちと繋ぎたい、それだけを考えながら進めてきた。

この実践が始まってからすぐに、ある朝の会で「今朝のニュースでアメリカの話が出ていたよ」と友だちに伝えていることがあった。また、保護者からは、「ニュースや番組でカンボジアのことが流れると、とても嬉しそうに見ている」「家でカンボジアの文化や子どもたちの生活のことを教えてくれる」などの声が寄せられた。子どもたちのこうした変化が私は何よりも嬉しい。

また、秋に保護者や地域の方々を招くお祭りを開く際、子どもたちから「カンボジアの遊びや言葉を教えるお店を出したい」という意見が上がった。残念ながら、最終的には候補から外れてしまい、実現しなかったが、子どもたちの中から「学んだことを周りの人たちにも知らせたい」という思いを感じることができたことは大きな成果と言える。

だが、予定していた外国出身保護者をゲストティーチャーに招いての多文化理解の場面を設けることができなかったことが心残りである。また、実践後半の「知りたいな いろんな国のこと」は、調べ活動の時間を十分に確保する必要があり、「子どもたちの関心に戻して活動させたい」という思いと時間的な難しさのジレンマを改めて感じた。

今回の研修では、本当にたくさんの素材を持ち帰ることができ、目の前の子どもたちに一番合う授業計画を立てようと努めた。だが、学年や学校の地域性なども変われば、また違ったアプローチの仕方も考えられる。1度の実践だけで終えるのではなく、今回得た「生きた素材」を今後の実践にも生かしていきたい。

参考資料

- ・ あなたのたいせつなものは なんですか (小学館)
- ・ カンボジアの子どもたち (学研)

